

## ブラジル・サンパウロにおけるプロサッカー選手育成の実態

～サンパウロ FC、PAEC(Pao de Acucar EC)、オーレ・ブラジル FC への訪問を通じて～

2011年2月中旬から3月初旬の約3週間、交流提携校であるブラジルのサンパウロ州立大学に短期留学を行った。ブラジルの若手育成現場に訪れ、現場のコーチから育成年代の選手に対するトレーニングに関するアドバイスを受け、ブラジルのタレント発掘や育成のシステムについて学ぶことが留学の目的だ。サンパウロ大のCortez先生とNunomura先生に仲介して頂いた、サンパウロ FC、PAEC(ポンジアスカール EC)、オーレ・ブラジル FC の3クラブへの訪問を通じて得たサッカーのプロ育成についての知見について報告する。

サンパウロ FC は国内最大級のクラブで、サンパウロ市の中心地から車で1時間程の距離にあるコティアーア市にトレーニングセンターを構えている。同センターには、1500人収容の新設のスタジアムや約10面の練習場、ウェイト場、プールなどのトレーニング施設に加えて、レストラン、医療施設(整形外科・歯科)や理容室まである。選手の宿舎も併設しており、選手の多くはそこで生活している。サンパウロ FC はブラジル全土を越えて海外からも選手が集まってくるようなクラブである。この日はU16のトレーニングを見学させてもらったが、U16に所属する20人はほぼ全員がプロになっていく。そんな彼らのトレーニングを観た第一印象は、日本の16歳のほうがレベルが上なのではないかということだった。そう感じた一番の理由はパスがずれてしまうことが多かったことだ。パスが浮いてしまったりバウンドしてしまったりすることも多かった。しかし、しばらく観察していて驚かされた。パスが浮いていようとバウンドしよう、パスの受け手は平気でコントロールしているのである。ボールを止めるという技術に関してはかなり差があるのではないかと感じた。トレーニングはSHOWBOLという施設で行われた(写真参照)。これが日本では見たことのない施設で、フットサルのような小さいコートがありタッチラインの代わりに壁が立っているのである。普通ならアウトオブプレーになるようなボールも壁に当たって跳ね返ってくる。つまり、ずっとインプレーが続くということだ。もともとは小さい敷地でも効率よくサッカーができることと、ボールを取りに行く手間を省くためというなんともブラジル人らしい理由で昔から一般的に広まっている施設だそうだ。プレーを観察していると、浮き球のボールコントロールや、どう跳ね返ってくるかわからないボールをコントロールするような機会がとても多く感じられた。この施設でのトレーニングがブラジル人のボールコントロールの秘訣であるように感じられた。



次に訪問したクラブはPAECというクラブで、サンパウロ州の2部リーグに所属している。サンパウロ市のモルンビーという繁華街にあるトレーニングセンターは2部のチームにしてはとても充実していて、練習場が3面とスタンド付きのピッチが1面、もちろんSHOWBOLもあった。

PAEC には Komiya Mario さんという日本とブラジルのハーフの方がコーチとして働いていた。16歳の時点では日本の選手もブラジルの選手もそんなに変わらないように見えたが、プロになるころには歴然とした差ができてしまう理由を尋ねてみたところ、ハングリー精神だと思えば Mario さんは答えてくれた。確かに、サンパウロ FC でも PAEC でも、ゲーム形式のトレーニングの際の選手達の雰囲気には驚かされた。全員が「自分が活躍したい」と思ってプレーしているように見えたのだ。ボールを受けると、最初に考えるのは突破であり相手のゴールを目指すプレーだった。日本では、なるべく相手のいないスペースにボールを運んで攻撃することを指導することが多い。しかし最終目標となるゴールの前には必ず相手がいる。日本は得点力不足だと言われているが、そのような指導が原因の一端になってはいないだろうか。育成年代の選手はブラジルの選手のように、多少ボールを失う回数が増えてしまっても突破を考えてプレーすることをもっと促してもいいのかもしれない。(写真は PAEC の練習場でクールダウンをする選手達)



最後に訪問をしたクラブはオーレ・ブラジル FC というクラブだ。このクラブはプロチームを持たない育成専門のクラブで、選手を育てて他のチームに売ることが目的としている。年間のリーグ戦には参加せず、地域の招待大会やフェスティバル形式の大会に参加して選手達を評価してもらうということらしい。ゲーム形式のトレーニングを観ながらコーチに質問させてもらったのだが、チームとしての戦術はほとんど教えていないということらしい。私の目には、チームとしての戦術だけでなくコーチング自体をあまりしていないように見えた。

3つのクラブを訪問して感じたことは、指導者は手取り足取り指導をしているわけではなくむしろじっくりと観察しているということ、そして試合形式のトレーニングになったとたん選手達の雰囲気が変わるということだ。ブラジルの選手にとっては試合は特別なのだ。日本の選手は練習に対しても試合と同じようにとても一生懸命取り組む。それが練習と同じように試合に取り組んでいるような状態になってしまっていないだろうか。あの雰囲気に日本の選手のほとんどは圧倒されてしまうのではないかと考えてしまった。

今回の訪問で私は、選手の育成において最も大事なことは選手が自分の責任でプレーすることだと気づかされた。ブラジル人のプロ選手がタフに成長しているのは、それらのことを当たり前のように取り組んできたからだと考える。そして指導者がすべきことは、どの選手が本当に才能のある選手なのかということを見抜く力を持つことだ。最終的にどんな選手になるのかを逆算したうえで、現在の成長段階に合わせた指導をすることが重要だと感じた。最後に日本との違いを感じた部分をあげるとすると、突破に対する姿勢とゲームの際の選手の雰囲気だ。どちらの方が良いと簡単に決められないことではあるが、もしかすると日本の課題を解決する手掛かりになっていくかもしれない。